

D 恐竜 Dinosaurs

恐竜博物館ニュース

第16号

2005.12.1

福井県立恐竜博物館

特集 特別展「大空に羽ばたいた恐竜たち—鳥類誕生の時代と環境—」を振り返って

目次 ▼連載:「日本古生物学界の生い立ち④」…2-3 ▼特集…特別展「大空に羽ばたいた恐竜たち—鳥類誕生の時代と環境—」を振り返って…4-5 ▼研究ノート/展示標本紹介(ポドザミテス・ライニイ、マメンチサウルス・ホチュアネンシス)…6 ▼教育普及活動/恐竜図鑑…7 ▼2005年12月~2006年3月催し物案内/後援会/編集後記…8



華美金鳳鳥
ジンフェンゴプテリクス



中華竜鳥
シノサウロプテリクス

学生だったころ

私が京都大学へ入学し、地質学の勉強を始めたのは1949年、戦後の混乱が治まりかけた頃で、社会も大学も新しい未来を目指して、活発に動いている時期でした。はっきりした目標をもって進学したのではないので、最初はとまどいました。それでも、2回生になって専門のコースを選ぶ頃には、はっきり古生物学を、それも貝類（軟体動物）化石を、と決めていました。その分野の研究室は第三講座で、教授は榎山次郎先生、掛川の研究で著名な古生物学者でしたが、その頃は主に構造地質学の研究をしておられました。幅広く指導のできる方で、イギリス仕込みの自主性を重んじる雰囲気が研究室にあり、それがこの分野を選んだ理由のひとつでした。

2回生のときの進論は掛川、3回生の卒論は宮崎の第三紀層の層序と化石でした。榎山・森島正夫・森下 晶先生のご指導を受けました。大学院へ進学して、郷里近くの瑞浪層群の化石の研究を始めました。当時、京大におられた藤田和夫さん（後大阪市大）と東大の生越 忠さんが、新しい考えで瑞浪の層序の研究をしておられ、刺激を受けました。

その頃の京大には貝化石の研究にとっての十分な条件がありました。たくさん外国文献、平瀬貝館からの現生標本があり、現生貝の専門の黒田徳米・波部忠重両先生がお向かいの動物学教室におられたのです。



榎山次郎先生（右より2人目）、中世古氏（右）・石田氏（左）・清水氏（後）と共に（1983）

瑞浪の化石と博物館

1957年に名古屋大学へ移り、竹原平一先生の地史学講座に所属しました。その後、森下 晶さんがこられ、スタッフが揃いました。柴田 博さん・森 忍さんはじめ、学生・大学院生がふえ、研究室の形が整いました。当時の名古屋大学の地球科学教室は地球物理学・地球化学の研究室があり、新しい地球科学を目指していました。そんな中で、古生物学は古いというイメージでとらえられ、ずいぶん辛い思いをしました。研究の対象は引き続き瑞浪層群で、1960年にまとめることができました。地層と化石から古環境を推定し、堆積盆地の発展の様子を復元した研究です。

その後、瑞浪ではウラン鉱床の発見があり、層序の研究が進みました。1971年からは中央高速道の工事に伴う調査が始まり、西本博行・柴田 博・岡崎美彦・伊奈治行・奥村好次さんらと参加しました。多くの資料が得られ、新しい事実がわかり、古環境・古地理が高い精度で復元されました。

すぐれた資料をベースにして、化石博物館の建設が検討され、実現の運びになりました。これまでの研究成果を市民のみなさんに伝える、大事なこととして捉え、取り組みました。横須賀市博物館の羽根田弥次先生に基本的な考えを教えて頂き、展示は丹青社のみなさんが手伝って下さいました。



森下 晶さん（右）と知多半島にて（1965）

ヨーロッパでの一年

博物館の開館を前にして、1974年ヨーロッパでの在外研究に旅立ちました。イギリス（ウェールズ）のスオンジーとフランスのリヨンです。最初はエイガー（D.V.Ager）教授（Principles of Paleoecology 古生態学の著者）のところで。早速復活祭の休みを利用しての学生巡検に参加、1週間ほど南海岸のジュラ～白亜系を見て、イギリスで層序学が発達した理由が理解できました。中生層が日本の第三紀層よりわかりやすいのですから。日本ではなかなか見つからないアンモナイトやベレムナイトが普通にあるのに驚きました。

半年の滞在中、エイガー先生の研究・教育の姿勢に感銘を受けました。後にはもっぱらフィールドへ出かけました。ワイト島の古第三系、ナリッジのCrag層（第四系）、コッツワルドのジュラ系、スノードン山など、今でも記憶は鮮烈です。

フランスではリヨン大学のデマルク教授のところで、多くの貝化石の標本を見ました。同時に、やはりフィールドでした。イギリスでもそうだったのですが、同時に博物館を見て歩き、瑞浪での経験がさらに深まりました。一年間で約150館、ちょっとした数になりました。

『世界の生い立ち』

4回

あったころ

糸魚川 淳二



エイガー教授（左）と、コツワルドにて（1974）

ゲロイナ(*Geloina*、ヒルギシジミ) 化石の発見

ヨーロッパから帰って後、瑞浪の研究は瀬戸内中新統へひろがってゆきました。そんな時、広島県油木町の西川 功さんから写真が送られて来て、それがゲロイナの化石であることがわかりました。マングローブにすむ熱帯系の貝類の化石は戦後、大山 桂さんにより富山県の八尾から報告されましたが、西川さんのコレクションに多くの熱帯系の貝類やオキナワアナジャコ化石があることを確かめ、その気になって各地の証拠を探すと、たくさん見つかりました。岡本和夫さんたちの発見もあり、1600万年前、日本の広い地域に、熱帯的古環境が広がっていたことがわかりました。そして、山野井 徹さん・津田禾粒さんがヒルギの類の花粉を黒瀬谷累層から発見され、より確かな証拠となりました。瀬戸内地域の中新世の古地理を柴田 博さんと復元したのもこの頃です。

熱帯環境調査

こうした状況の中で、津田さん、山野井さんたちと、現生のマングローブ沼の環境の調査を始めました。比較して古環境をより確かなレベルで復元するためのものです。シンガポール・マレーシア・タイなど10ヶ国130地点、21年間に延べ127日の調査をし、2003年にまとめることができました。東



津田禾粒さん（左）と、シンガポールにて（1981）

南アジアの国々において、自然環境が失われてゆく中で、かなりハードな調査でしたが、いろいろな発見・出会いがあり、よい思い出として残っています。まとめの中では、最新の化石のデータも加え、できる限りの古環境・古地理の復元をしました。津田さんが早くなくなられて残念な思いでしたが、成果を公表できてほっとしました。

自然史博物館から「えこ」ミュージアムへ

この間、豊橋市自然史博物館の開設に加わり（1988年開館）、その後も活動のお手伝いをしました。その他、中津川市鉱物博物館、美濃加茂市民ミュージアムなどの博物館の開設や運営に参加し、楽しい思いをいたしました。いくつかの挫折もありましたが、本来の古生物学、それを一般化する博物館の仕事をして2本立てで、長年やれたことは幸せなことでした。

現在はシデコブシ・ハナノキなどの、東海地方に自生する希少植物の自生地を地質・地形などを調査していて、最終的にはこうした自然保護・保全の活動を博物館の仕事の一環として捉える、新しいスタイルの博物館、「えこ」ミュージアムの概念を完成させたいと思っています。

一方、楽しみで世界各地を訪ねています。ハワイ・イタリアの火山、カナディアンロッキーのバージェス頁岩、中国の恐竜・澄江動物群、西オーストラリアのストロマトライトなどで、自分にとっての、新しい発見が続いています。

この50年間、社会の動きは速く、古生物学も古生物学界も大きく変わりました。振り返って感無量です。



カナダ・バージェス頁岩の露頭にて（2004）

特別展「大空に羽ばたいた恐竜たち」

今回の特別展は、平成17年7月15日(金)から11月3日(木)までの108日間にわたって開催され、期間中の入場者は7万6千人あまりとなりました。東西の始祖鳥類(始祖鳥と華美金鳳鳥)を中心に、世界的に注目され話題となっている中国遼寧省の羽毛恐竜と鳥類の化石を含め、約170点の標本を展示し、恐竜と鳥類の関係とその時代の生物や環境を紹介しました。

特別展の主演「始祖鳥」

この特別展の主演である始祖鳥の実物標本の展示は当初、所蔵している博物館の反応から考えると、かなり難しいと思われました。わずかな望みを託して、かつて恐竜博物館建設の視察で訪問したドイツのジュラ博物館に、特別展の趣旨や内容をメール等で伝え、展示解説書や紀要などの出版物を送り、当館が信頼できる博物館であることをアピールし、始祖鳥の借用依頼をしたところ、快諾を得ることができました。さらに、中国の貴重な標本類を数多く借りた北京の中国地質科学院地質研究所から、アジアの始祖鳥類である「華美金鳳鳥」が借りられるという嬉しい展開が待っていました。それまでに特別展準備のため同研究所と友好的な関係を築いてきたこともあって、出品の許可を得ることができたのでした。これによって、東西の「始祖鳥」がこの特別展でいっしょに展示される運びとなったのです。



ジオラマ



始祖鳥



触れる展示(恐竜のふん石)



ジュラ博物館(古生物担当のケルブル-エーベルト氏)



キッズコーナー、世界のミュージアムグッズ



中国地質科学院地質研究所での打合せ

「鳥類誕生の時代と環境」を振り返って

特別展講演会

この特別展では日を違えて二人の特別ゲストに講演をお願いしました。1回目は、中国地質科学院地質研究所の季強教授に話をしてもらいました。季教授は鳥と恐竜の関係を見直すきっかけとなった最初の「羽毛恐竜」である「中華竜鳥」を研究した方で、現在まで中国から発見される羽毛恐竜のほとんどを研究してきました。今最もホットな話題である「中国の羽毛恐竜と鳥の起源」についての情報を、裏話も交えて紹介してくれました。

2回目は恐竜漫画家のヒサクニヒコ氏によるものです。ヒサ氏は恐竜のイラストを描くだけではなく、恐竜そのものにも深い興味を抱いておられ、恐竜関連の著作もあります。「鳥はどこまで恐竜か」と題して行なわれた講演の内容は、現在の鳥の体や行動のどの特徴が恐竜から引き継いだものなのかを考えることでした。恐竜の化石から鳥を思い浮かべてあれこれ想像する楽しい講演でした。



第1回特別展講演会 (9月23日)



第2回特別展講演会 (10月16日)

特別展解説ツアー

特別展期間中は「ツアー」と銘打って、計4回博物館研究員による特別展解説を人数限定で行ないました。テーマとその狙い、標本の学問的意義・位置づけ、見どころ等々を約1時間半から2時間にわたって解説し、見学しました。解説パネルには書ききれない、裏話も含めた事柄を知ることができるからか、あるいは直接研究員が話すためか、活発な質疑応答ができ、参加者は目を輝かせながら興味深く展示を見学していました。



特別展ツアーの様子 (9月18日)

音声ガイド

この特別展で初めての試みとして音声ガイド機器を導入しました。目玉となるいくつかの標本をピックアップして詳しい音声解説を加えました。展示標本に対応する番号を押すと、機器の小型ディスプレイに補足画像情報が写し出され、ヘッドフォンから解説が流れる仕組みになっています。解説パネルだと読む文字が膨大になってしましますが、音声だと耳からすんなり入ってくるということで好評でした。



音声ガイド機器

来場者の様子

開催期間中、アンケートにご協力いただいた3,500人以上の方々の感想やご意見では、世界初あるいは日本初公開の「始祖鳥」の実物標本を見ることができて良かったとか、ジオラマの模型や中央ステージの大型肉食恐竜に強い印象を受けた方が多かったように思います。また、実物の標本を見たり、触れることができたことに感動された方々もおられました。

その一方で、予備知識がなくてもわかるような解説文や、パネル構成の工夫を求める声も聞かれました。これらのご意見やご感想を今後の特別展に活かすように努めていきたいと思えます。

この特別展を振り返り、中国地質科学院地質研究所、ドイツ・ジュラ博物館をはじめ企画に協力してくださった方々に深く感謝するとともに、ご観覧くださった皆様に厚くお礼申し上げます。

なお、この特別展は来年春と夏に旭川と浜松を巡回する予定です。
(後藤道治・一鳥啓人)

穿孔貝（せんこうがい）



化石穿孔貝

「穿孔貝：Boring Shell」といいます。それらは、イシマテガイ (*Lithophaga*：イガイ科) のなかま、ヒメジャコガイ (*Tridacna crocea*：シャコガイ科) のなかま、ツクエガイ科 (*Gastrochaenidae*)、ニオガイ科 (*Pholadidae*)、イワホリガイ科 (*Petricolidae*)、フナクイムシ科 (*Teredonidae*) などです。



北海道羽幌町の築別層基底の穿孔貝化石産状

二枚貝類は、普通、水底の表面や水底の泥や砂の中にもぐって生活していますが、中には硬い岩石やほかの貝殻、サンゴ、木材などに穴をあけて生活しているものもいます。そうした二枚貝を

き回ることができないわけです。岩場や海沿いのがけなどを歩いていると、岩に穴があいているのが観察できることがあり、その穴の中に白いものがあれば、おそらくそれが穿孔貝で、よく見かけるのは、カモメガイなどのニオガイ科のなかまです。それらは穿孔貝の中でも、固い岩石に穴をあけるもので、化石としてこうした岩石に穴をあける穿孔貝が出てくると、それは重要な意味をもっています。穴をあけられた地層は、穴を掘るためにある程度固くなっていないと成りません。つまりその地層が堆積した後、固くなるまでの一定の時間が経過しているということで、地層の不整合が考えられるわけです。穿孔貝は、そうした理由から不整合の証拠の一つとされています。

き回ることができないわけです。

恐竜博物館の1階、「地球の科学」に展示してある化石穿孔貝は、*Penitella kotakae* というニオガイ科の貝で、北海道北西部、羽幌炭田の新生代中新世の地層から採集されたものです。1960年の論文で発表されていますが、それ



現生穿孔貝

までは一連の地層と考えられていたものが、穿孔貝の発見により時代的なギャップがわかり、さらに上下で貝化石の組成に違いがあるということから上部と下部が区分され、新しい地層として再定義されることになりました。(野田芳和)

ポドザミテス・ライニイ

Podozamites reinii

本種は石川県白峰村牛首（現在の白山市白峰）から採集された標本に基づいて、1877年、ドイツ人古植物学者のゲイラー氏 (H.Th.Geyler) により設立されました。種小名のライニイは、氏の友人で、この化石を白峰村で採集したライン氏 (J.J.Rein) にちなんでいます。

「日本の恐竜時代」コーナーに展示中のこの標本は、ライン氏の採集地に近い「桑島の化石壁」で新たに発見されたもので、白峰村教育委員会（当時）から譲り受けました。長円形の葉にははっきりとした葉柄があり、（長）枝に二列ないし螺旋状に互生配列します。葉脈は多数の平行脈で、先端部で収束する特徴があります。葉の形や脈の特徴は現生のナギ (*Podocarpus nagi*) によく似ていますが、ナギは葉が対生する点が異なります。



ポドザミテス属の化石は世界各地の中生代の地層から報告されています。しかし、繁殖器官がついた状態で見つかっていないため、その類縁はまだ明らかになっていません。恐竜化石を産する手取層群からもたくさんの化石が見つかるので、植物食恐竜の餌だった可能性も考えられます。現在進めている発掘調査での新たな発見を期待しています。

(矢部 淳)

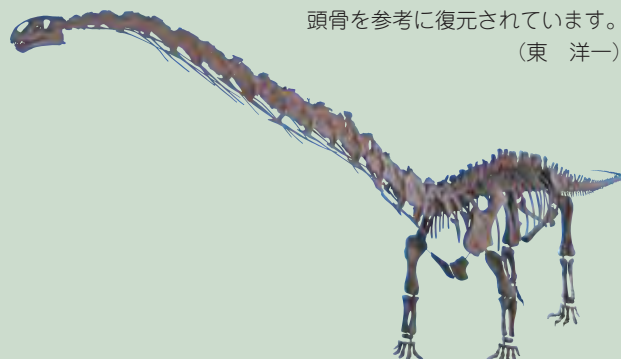
マメンチサウルス・ホチュアネンシス

Mamenchisaurus hochuanensis

このマメンチサウルスの骨格は1972年に、中国科学院古脊椎動物・古人類研究所の楊鍾建教授らによって命名されました。産地は、四川省重慶市合川区を流れる嘉陵江流域の古楼山の山麓で、中生代ジュラ紀後期の地層から発掘されたものです。全長が約23メートルもある大型の竜脚形類です。首の骨（頸骨）が19個もあり、首の長さは全長の約半分を占めていました。マメンチサウルスは草原に生活し、高木の葉を食べていたと考えられています。

発見されたマメンチサウルスの骨格には頭部の骨がありませんでした。そこで、長い間復元された骨格には北米で発見されたディプロドクスに似た頭骨がつけられていました。しかし近年、四川省や新疆ウイグル自治区からマメンチサウルスの頭骨の化石が発見されました。特に、四川省から発見されたマメンチサウルス・ヤンギの頭骨は保存のいいもので、その輪郭はカマラサウルスに似ていたことがわかりました。恐竜博物館に展示されているマメンチサウルスの復元骨格は新しい頭骨を参考に復元されています。

(東 洋一)



恐竜ふれあい教室

「親子で恐竜折り紙をつくろう！」

8月27日(土) 13:00~15:00

夏休み最後の週末となった8月27日(土)、恐竜ふれあい教室「親子で恐竜折り紙をつくろう！」が行なわれ、29組61名の親子に参加していただきました。

このふれあい教室は4歳から小学3年生までの親子を対象としており、お父さんお母さんと一緒に恐竜折り紙に挑戦してもらおうということで行なわれました。

この日は、いつもの折り紙教室とは少し違い、25cm×25cmサイズの折り紙で折ってもらいました。一般的に使われる折り紙よりも少々大きめだったので子供さんの小さな手で折るにはなかなか大変だったようです。しかし悪戦苦闘しながらも一生懸命折ってくれました。難しいところはお父さんお母さんと協力して折るといった光景も見られました。

大きなブテラノドンとティラノサウルスが完成後、ジオラマ作りを行いました。木や山などのパーツを自分の好きなところに置いたり、色鉛筆で草や川や湖などを書いたりと様々な「恐竜の世界」が出来上がりました。出来上がった後、満足そうに私たちスタッフに見せてくれる子や、部屋に飾って家族に見せるとい子、夏休みの宿題で学校に持って行くとい子もおり、それぞれ大事そうに持ち帰っていました。親子共々、とても楽しんでいただけたように思います。

(砂子英恵)



博物館自然教室

「骨を鑑定してみよう！」

10月2日(日) 13:00~15:00



脊椎動物の化石を研究するためには、今生きている様々な動物の骨や歯の形がヒントとなります。今回は「骨を鑑定してみよう！」と題して現在生きている動物の骨などを観察しました。

参加者は骨の一部分を手に持ちながら、その骨はどの動物のどの部分なのかを鑑定しました。骨の一部分だけだと、どの動物なのかということさえもなかなか分からず、皆さん頭を悩ませていました。途中、職員からヒントをもらいながら、自分の持つ骨と骨格標本をじっくりと観察をなさっていました。その後、職員から答えを告げられると、「なるほど！ここの部分だったか」と納得していた方もいました。

そして今回、並べられた標本の中には、昨年勝山市にて捕獲された、ツキノワグマの骨格・剥製もありました。普段は博物館の収蔵庫に保存されており、あまり目にする事のない標本とあって、参加者の目をひいていました。骨だけ見ると、肉が付いているものを見るのでは、全く違う動物なのではないかというくらい大きさが違い、皆さん大変びっくりしていました。

色々な動物の骨格を間近に見ることができ、題名どおり、骨を鑑定できたのではないのでしょうか。(砂子英恵)



ニッポノサウルス・サハリネンシス

(「日本のトカゲ」の意味)



ニッポノサウルスは、1934年、日本領だった樺太(現ロシア・サハリン)で発見され、「ニッポン竜」という学名がつけられました。頭骨の一部をふくむほぼ全身の骨が発見されています。

分類：鳥盤目鳥脚亜目 時代：白亜紀後期
産地：ロシア サハリン
全長：4.1m

※所定の方法にて、行事名、氏名、年齢、住所、電話番号を、博物館までご連絡ください。開催日の一ヶ月前から受付を開始し、定員に達し次第締め切らせていただきます。ただし、申し込み多数の時は抽選となる場合があります。
※当館 Web サイトの行事案内ページ (<http://www.dinosaur.pref.fukui.jp/event/>) もご覧ください。

博物館セミナー

- 場所/研修室
- 申込/電話、FAX、E-mailにて

■「大地の生い立ちを探る

化石が語る海の環境変化

日時/12月4日(日) 13:00～14:30

内容/今の陸地もかつては海だった。化石などを通して太古からの海の環境の移り変わりを見ていきましょう。

講師/野田芳和

■「大地の生い立ちを探る

手取の森から探る白亜紀の日本

日時/1月8日(日) 13:00～14:30

内容/とても暖かかったと言われる白亜紀。恐竜化石で有名な手取層群のものをはじめとして、白亜紀の植物化石から当時の気候などについて考えます。

講師/矢部 淳

■「“冷凍マンモス”が教えてくれること

日時/3月12日(日) 13:00～14:30

内容/どうしてシベリアで“冷凍マンモス”が見つかるのか。最新の研究からマンモスのからだ・くらし、そして地球環境の変化を探ります。

講師/佐野晋一



博物館自然教室

- 場所/実習室
- 対象/小学4年生から一般 20名
- 申込/往復ハガキ、E-mailにて

■「化石をクリーニングしよう！」

日時/12月24日(土) 13:00～15:00

内容/身近なものや専用の道具を使って、化石のクリーニングを教えます。

担当/宮田和周

■「身近な石を調べよう！」

日時/2月26日(日) 13:00～15:00

内容/顕微鏡などを使って、石の内部がどうなっているのかを調べます。

担当/佐野晋一



恐竜ふれあい教室

- 申込/往復ハガキ、E-mailにて

■「親子で恐竜折り紙をつくろう！」

日時/1月15日(日) 13:00～15:00

内容/折り紙でティラノサウルスなどの恐竜を作り、ジオラマを作ります。

担当/砂子英恵

場所/研修室

対象/4歳～小3の親子 40組



■「親子で恐竜の絵をかこう！」

日時/3月26日(日) 13:00～15:00

内容/いろいろな恐竜の特徴をつかんで、恐竜のイラストに挑戦します。

講師/恐竜漫画家 ヒサクニヒコ 先生

場所/研修室

対象/4歳～小3の親子 20組

コンピュータ教室

- 場所/実習室
- 対象/4歳～小3の親子 15組
- 申込/往復ハガキ、E-mailにて

■「恐竜年賀状をつくろう！」

日時/12月11日(日) 13:00～15:00

内容/恐竜の絵を貼ったり文字を組み合わせて年賀状を親子でつくります。

担当/千秋利弘

■「コンピュータで恐竜をかこう！」

日時/3月5日(日) 13:00～15:00

内容/恐竜の絵をコンピュータで親子いっしょにかいてみます。

担当/千秋利弘

特別展図録

「大空に羽ばたいた恐竜たち」

中華竜鳥をはじめとする羽毛がはえた恐竜たちの発見によって、恐竜研究は新しい時代の幕開けを迎えました。また従来ドイツでしか発見されていない始祖鳥類、華美金鳳鳥が中国で昨年発見され、鳥類の起源について再び注目が集まっています。

この図録では、福井県立恐竜博物館 開館5周年記念「大空に羽ばたいた恐竜たち展」で展示された、世界初公開となる中国の始祖鳥類、本邦初公開となるヨーロッパの始祖鳥、そしてその時代を生きた動物や、もちろん恐竜について紹介されています。

やさしい文章で読みやすく、恐竜から鳥への進化の解説書としても、幅広い方にお読みいただけることでしょう。また、鳥の飛翔の仕組みについても言及され、たいへん興味深い内容となっています。

価格: 1,500円



ダイノ メイト

●後援会より●

10月16日に「鳥はどこまで恐竜か」という演題で後援会理事長ヒサクニヒコ氏の講演会が行われ、会員の皆様の興味関心を引きました。今年は後援会の行事として7月23日に福井県和泉村下山と伊月で化石採集会、24日に恐竜博物館で「大空に羽ばたいた恐竜たち展」を見る集いを開きました。また8月21日～27日(6泊7日)にかけて中国黒龍江省へ恐竜体験の旅を実施しました。いずれの行事も会員の皆様には有意義なものであったと思います。来年度も更に中味の工夫をしてより良い行事にしたいと思っています。

ただいまダイノメイト会員を募集しています。

郵便振替用紙に、住所、氏名、生年月日を記入されて会費を下記口座に振り込んで下さい。個人会員…年2,000円、家族会員…年3,500円 但し会費を3ヶ年分まとめて納入されますと、個人会員…5,700円、家族会員…10,000円に割引させていただきます。郵便振替口座 00770-9-47730

加入者名 福井県立恐竜博物館後援会 ダイノメイト

くわしくは <http://www.fdms.jp/>

編集後記

108日間にわたる特別展「大空に羽ばたいた恐竜たち」が終わりました。全国からの多くの方々に恐竜から鳥への進化についての展示や関連した行事を楽しんでいただけたのではないかと思います。「感動しました！」という多くのお客様の声に、特別展開催に向けて準備してきた苦勞が報われる思いがしました。ありがとうございました。

今、身近に見られる鳥は肉食恐竜の進化形で、1億数千万年かけて進化した姿を目にしているかと思うと、今まであまり気にとめなかった鳥の姿に目を凝らすようになります。我が家の食卓にのぼる鳥の唐揚げも「恐竜の唐揚げ」かと思うと、食べる前にじっくり観察してしまう自分がいます(笑)。

さて、博物館の周りも冬の装いになってきました。緑の木々に囲まれた博物館もいいですが、真っ白な雪からのぞいた日光に輝く恐竜ドームもきれいなものです。是非、冬の恐竜博物館にお越しください。(小島啓市)